

日本薬学会 第125年会 ランチョンセミナー

日時：平成17年3月29日（火）12:30-13:30

会場：C会場（東京ビッグサイト1階）

生活習慣病の新たな標的と治療

座長 新井洋由 先生 東京大学 大学院
薬学系研究科 衛生化学教室 教授

演者 下村伊一郎 先生 大阪大学 大学院
医学系研究科 分子制御内科学
生命機能研究科 個体機能学 教授

糖尿病、高脂血症、高血圧やこれらリスクファクターの集積によっておこる動脈硬化疾患が、現在の我が国において大きな医療問題である。背景には、運動不足や過栄養による肥満が存在する。リスクファクターの集積は動脈硬化疾患の危険度を飛躍的に増大させる。腹部周囲径の増大、高トリグリセライド血症、低HDLコレステロール血症、高血圧、高血糖の5項目のうち3項目以上を満たすものをメタボリックシンドロームと呼ぶ。これらの人々は、現在あるいは将来、心筋梗塞をはじめとした動脈硬化疾患の危険性が極めて高く、現在かかえる動脈硬化症の診断治療・これらリスクファクターに対する積極的な治療・他のリスクを発症させない予防措置等、積極的に医療介入が施されるべきである。

これら生活習慣病・メタボリックシンドロームの診断・治療の方向性において、脂肪組織由来物質アディポサイトカイン概念の重要性が注目されている。当初の研究でヒト脂肪組織において発現している遺伝子の約30%が分泌因子であることが見いだされた。脂肪組織は正常体重者でも全身の重量の10-20%、肥満者では50%を越えるような巨大な臓器であり、例えば細胞一個の分泌量が少なくとも総量としてばく大きなものになる。

我々がヒト脂肪組織より同定した脂肪組織特異的ホルモン因子であるアディポネクチンは、抗動脈硬化・抗高血圧・抗糖尿病作用さらに最近では抗肝線維化作用、抗腫瘍効果が見出されている。肥満時にその血中濃度が低下し、生活習慣病・メタボリックシンドロームに加え、肥満と連関の強い脂肪肝・肝硬変、大腸がん、乳がんなどの病態にも関わると考えられる。その意味で今後のアディポネクチンの診断的および治療的意義は高い。

本講演ではスタチン類の一つプラバスタチンのアディポネクチン産生に対する効果も紹介したい。

共催：三共株式会社